

田中隆尙撰集

第六卷

田中隆尙撰集 第六卷

平成十八年十二月十五日印刷
平成十八年十二月二十五日發行

著 者 田 中 隆 尙

發行者 唐 澤 明 義

發行所 展 望 社

郵便番號一一二・〇〇〇二

東京都文京區小石川三・一・七

エコービル二〇二

電 話 〇三(三八)四一九九七

FAX 〇三(三八)四三〇六三

振替〇〇一八〇・三・三九六二四八

印刷・壯光舎印刷／組版・エムツークリエイト

ISBN 98546-162-6

隨筆三

目次

桃園譜

爐邊の校正	九
月光の曲	三二
枇杷	五六
黒猫	九二
さくら	一二三
病歴	一三二
嘆願	一六七
桃園譜	二〇〇
後記	
からす	二六七

しらがざる	三〇一
千代の松原	三七三
「新墾」あれこれ	四四五
田中隆行記念祭寄贈歌について	四八一
レオナルド・ダ・ヴィンチ	
ウインザア城のレオナルド素描	四九七
レオナルドの素描	五〇三
安倍能成先生	五〇九
一木會	
一木會記事	五二
一木會の師弟	五三六
河野與一先生	五五
森銑三	
森銑三さんと「ももんが」	五六

弔辭……………五九

森銑三著作三冊……………六〇

編集覺書……………六〇七

桃園譜

爐邊の校正

校正とは口オマの奴隷の石運びのやうなものだと私にいつてくれたのは、多分目立たないしごとに対する思ひやりにすぎなからうと思つた。實際私は月々ももんがといふ同人雑誌の校正をやつてゐるが、しごとそのものをそれほど苦勞に感じたことはない。ただ校正をしてゐる作品が私自身の評價でどうしても没書にした方がいいと思ふのに、紙面の都合とか出資者に對する義務とかにしばらくはのせなければならなくなつた時、その校正をしてゐると嘔吐をもよほすやうな本能的嫌惡を感じる。そしてかういふしごとにしたづさはつてゐるのを徒勞にすぎないやうにおもふ。しかしそれは校正自體の苦勞ではない。又いつも原稿があつまるのがおそいために印刷所に原稿をわたすのが出來日前一週の間ぐらゐになり、したがつて校正刷がはじめるのが二日前になつて、出來日を入れて三日の間に六十四頁の初校再校を見なければならず、しかもちやうどその間に十時間の講義があるので、その三日間は大體しごとでいつぱいといふ状態になる。ところが印刷所の都合や何かで校正刷が三日にまんべんなく出ず、後半の方にへんぱにもちこまれると、その後半のいそがしさは二倍にも三倍にもなり、結局講義の準備などほつたらかしてやつと出來の日に間にあはせるといふことになる。さういふ

時教場で學生から質問されて、ごまかしきれずにほろを出したり、誤譯を指摘されて赤面などするの
に、他方校正も間ちがひだらけになつて、人の非難をまぬかれることはできず、校正はやはり簡単に
はできないものだとおもふ。しかしそれは校正自體のむつかしさではない。

むしろ私自身自分の校正はそれほどまづくはないとおもつてゐる。ももんがの同人にはいろんな意
味の秀才があつて、それぞれの番附をつくられると私などはいつても下づみになるかもしれないが、さう
いふ秀才にしてもらつてもやはりいくつか見おとしがのこつて、私が見おとした數と大差がない。誰
がやつてもかぎられた時間でかぎられた回數しか讀むことができれば結局このくらゐにしかでき
ないだらうとおもふ。

しかし單行本を出版するとなると大分事情がちがふ。單行本は期日を嚴格にまもるよりも、校正に
嚴密を期しなければならぬだらう。私の本を出版する機會はとうにきてゐたのに、一年のばし二年
のばししてゐたのはひとつはその實行に不安をいだいたためであつた。私はこの二三年毎年からだの
どこかに故障ができ、學校のこと、雑誌の編輯發行以外のことに手をのばすのをあやぶんだ。

しかしその危惧はむしろ單行本の頁數からきてゐて、雑誌の何倍かの頁數を本を出すまでいそいで
見つけなくてはならないといふところにあつただらう。だから若し集中的にすることさへさけるこ
とが出来、雑誌の時より數回多く讀めば、それほど苦勞もせずに誤植を完全になくすることができるだ
らうと思つた。事實雑誌のときでも都合よく三度も四度も見ることできた時は誤植は一つか二つに
すぎなかつた。その一つか二つを、あと二三度くりかへし讀んで見つけるといふことはそれほど實現

不可能ではなさうにおもはれた。

昨年の冬いよいよ本を出すことにきめたとき私は〇といふ舊友を思ひ出した。〇は頭腦緻密で學生時代から外國語がよくできた。學徒出陣で將校になつたが、防諜機關のしごとをしてゐたため戦後公職追放となつて官廳につとめることができなくなつた。それで翻譯や校正をしたりしてすごしてきたが、追放解除になつても、すでに機を逸してしまつたためにやはり翻譯や校正をつづけるよりほかしごとがなかつた。その校正専門家の〇が今ひきうけてくれれば誤植を皆無にすることができるとおもつたのである。

〇に早速依頼のはがきを出した。はがきには上下二巻で千枚ちよつとこえるといふ大體の枚數と今年末から明年の四月までといふ大體の期限とを書いて、謝禮のこともさしはりのないやうに尋ねておいた。〇から折返し承諾の電報がきて、翌日次のやうな質問狀がきた。

一、自家出版かどうか。自家出版でないとしたら出版屋はどの程度まで校正にくちばしを入れるか。
二、自分の擔當するのは第何校のいかなる部分(初校を原稿とひきあはせる、再校を初校とひきあはせる、別刷に目をとほして氣のついたところに書きこみをし、それを君なり出版屋なりが本刷を校正する際の參考にするなど)か。分擔さへはつきりしてゐれば自分はどうでもかまはない。

三、郵便事故のおそれはないか(とくに年末年始)。ほかに連絡方法はないか。速達書留にしてもかなりおくれる場合があるし、原稿を郵送することは目方もあるしいたむおそれもあるのであまり感心

できない。印刷所が神田附近にあれば自分が君の代理としてとりに行つてもよい。

四、謝禮は以前の借金の五百圓を帳消しにしてもらひ、そのほか二千圓ぐらゐでいいとおもふ。ざつと目をとほすだけだつたらその二千圓は要らない。交通費通信費は別に計算して實費を請求する。

五、出版屋がまだきまらなかつたら名義だけかすところをさがしてはどうか。

右の文はこまかな質問状であるが、私はむしろ〇の頭の緻密さを再確認してほつとしたといつていい。又謝禮の件の返事では大變安堵したといつていい。校正の謝禮の金額は私には見當がつかなかつたが、大體五千圓ぐらゐではなからうかと想像した。もつともこの暮から明年の六月まではそれを一度にはらふゆとりができさうになかつた。友人をたのんだのもひとつは〇の内職の資となればよいとおもつたのも事實であるが、私のはうでも分割拂とか延期とかにしてもらへるといふ打算がはたいてゐたといつていい。しかるに相手の要求が私の推定額の半額にすぎなかつたので、私の推定額どほりに拂へば相手も満足するだらうと空想した。又校正してゐるうちに校正料の相場といふものもわかるだらうから萬一右の金額が相場よりかなり低ければそれはそのとき考へればいいだらうとおもつた。

そこで質問状に對する返事を書いた。

一、全面的に自費でもなく、全面的に書肆がひきうけたでもない。損害を自分が負擔するといふ約束である。書肆は校正には關係しない。

二、君に擔當してもらひたいのは初校と原稿をひきあはせ、再校三校も前校とひきあはせ、氣のつ

いたところを注意してもらふことである。しかし再校以下は會つて相談したい。初校は最初に印刷所から君の方におくるやうにしたからすみ次第自分の方におくつてもらひたい。なほもう一人自分の學校の助手をたのんであるが、君と自分とが主力になつてやるやうにしたい。

三、郵便事故のおそれは自分にもわからない。印刷所は郊外にあり第一回目はとにかく君の方に直送するやうにしてある。

四、謝禮の件は君の寛容にあまえて校正期間中毎月一千圓おくり、最後に本が出て三ヶ月以内に別に相當額をおくる。交通費通信費は別に請求してもらひたい。とりあへず十二月分一月分として二千圓同封する。

私はちやうどそのころIさんといふ懇意の人に就職のことをたのまれてゐてゆつくり手紙を書いてゐる時間がなかつたので、質問の要求に對する最小限度の返答をして、手紙では意がつくせないから會つて話したい、二十五日以後の日時を指定してくれば待つてゐるといふことをつけくはへた。Oは以前によく私の家に遊びにきたことがあつたからである。

私はこの返事を書きながらやはり校正といふしごとは厄介なことになるかもしれないと感じた。それは私の豫期しないこまかな質問狀がその奥に勞役にも似たしごきがよこたはつてゐるといふことを豫感せしめたのかも知れない。とにかくOの方が校正に關しては私よりも玄人であり、Oの手紙から誘發させられる豫感は輕視できないだらうとおもつた。

いよいよ原稿を書肆に手わたしてからはるか前方に何か重々しいものがよこたはつてゐるやうな氣

がしたが、それでもとにかくまだ日常の日々がつづいてゐた。いつのまにか寒くなつて私の出講してゐるB市の學校の研究室にも火がはいるやうになつた。毎年十二月になると大きな金火鉢がすゑられ、小使が毎日炭火をはこんできてゐたが、今年はその火鉢がはいらず、知らぬまに圓筒型のプロパンガスの暖爐がはいつて、室のすみにプロパンガスのボンベが置いてあつた。T教授がいつのまにかたのんだものであつた。しかし私はつけ方をしらないので自分で火をつける氣になれず、時たま教授があつてゐる時に出くはしても、人がゐるところでは何もする氣になれないので、すぐ室を去つて、そのあたかさを享受することはなかつた。

Iさんの就職のことも二三舊師に紹介してみたがなかなかうまくゆきさうになかつた。そのうち一二の同僚から君にたのむといつて就職の件を持ちだされるので、誰のことかとおもふと、それがやはりIさんのことであつた。Iさん一家とは私の方が懇意なのに、同僚をとほして私にたのんできたのは、Iさんの家族がいろいろの人にたのみ、結局私とIさんとが専攻がおなじだといふので、その人達が又私のところにたのんできたのである。私は結局校正のしごとはじまる前に、D市の教授をたづねて依頼することにし、Oに二十五日以後きてほしいといつてあつたのを二十七日以後といふことに變更した。さうするよりD市行の日程がとれなかつた。

二十六日になつて私はD市から歸つてきたが、Oからは何の連絡もきてゐず、M書肆から最初の十六頁ほどの見本刷がきてゐた。年末から年始にかけての休暇を十分に利用しようといふ豫定が期待はづれになりさうであつた。大晦日もまぢかにせまつて年賀狀を書きはじめた。たのんであつた餅もき